
臨床社会学の方法

(34) 関係の非対称性と権力の勾配

—「俺のっている講義が休講になったのでこれから会いたい」とラインで言われた女子学生と考えたこと—

中村 正

1. ラインのメールが講義の前にきた

副題がストレートに表現している今回の内容は、「臨床社会学の方法(31) 男らしさを『聴く』—他者をとおして自己の欲望を実現させるコントロール行動の意識と態度—」(第43号)、「臨床社会学の方法(32) 怒りが暴力を振るわせるのか—感情を生起させる「憎悪・嫌悪」の構図とアンガーマネジメントの乗りこえ—」(第44号)、「臨床社会学の方法(33) その「ナラティブ」は誰の言葉なのか—沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声—」(第45号)と関連する話だ。

ある事例をもとに深掘りしてみたい。学部三回生の女子学生のエピソードである。これは4年程前の出来事だ。木曜日の3限目の授業の前に携帯メールがあったという。「俺のっている講義が休講になったのでこれから会いたい」と。彼女はこれからはじまる私の講義をとっている。悩んだ彼女はどうか。社会病理学の講義なので、デートバイオレンスやDVという親密な関係における対人暴力の話をした直後だった。

そしてこのエピソードをめぐる学部の演習、大学院の授業で議論もした。卒業研究の論題にした学生もいたくらいだ。若い世代だから身近な話題でもあり、すこぶる反応がよかった。学生たちに考えて欲しいことは非対称な

関係性と権力の勾配のことである。自らが恋愛をとおして再生産している「社会」の姿、とくに愛の名の下で構築されていく関係性の様相である。

このエピソードを持ってきた女子学生はきちんと授業に出ていた、つまり彼のメールにNoと返事をした。断ることができている。とすると、このラインメールのやりとりから重要なことを考えたのだろうと思った。休憩の時間、少しばかり話をした。確かにNoと言ったのだが、返信してからも悩んだ、あるいは考えてしまったらしい。そのことについての相談だった。彼女にとって、曖昧で不安な、後味の悪い悩ましいエピソードだったらしい。わだかまりを言葉にしたいとやって来た。

そこで深掘りすることにした。私にも娘がいるので「そんな奴とは別れてしまえ！」と思ったが、それは教師らしくない、単なる親父の意見だ。教壇からそんなこと言っただけだと思いつつ私は、「同じようなことを逆にしたことがあるか」と聞いた。「そんなことはしません。」と彼女は明言した。そこでわだかまりを言葉にすべく次回までに次のような論点を考えた。このエピソード自体は以前の号でも紹介したことがある。以下は彼女に返答した内容である。考え過ぎのようにして整理した事項だ。

2. このラインメールを深掘りして解釈してみた

①他者の時間を奪うことの無配慮

同じ大学の学部に通う恋人同士である。専門科目は高学年配当科目なのだから、いまさら新入生でもあるまいし、どんな予定なのか相互に知っているはずだ。考えてみると、件のメール、一方通行なのだ。学生なので授業を優先させることは建前だ。もちろん彼女は建前ではなくきちんと教室に来ている。

もし仮に彼女が同じようなことをしていたら私はその時点で対話をしない。二人とも授業よりもデート優先だからだ。そうではないのだから彼の行動は対等ではない。特に相手の時間、意欲、機会を奪うことへの無配慮が気になる。講義は後回しで自分の都合に合わせるように彼は要請している。いや指示している、あるいは命令しているようでもある。恋人とはいえ学生同士だ。大学生は学ぶことが仕事である。仕事を休めと言っているに等しいということに気づいていないからこうした内容なのだろう。彼にとっての学業はしょせんその程度のものだろうと推測できる。

もちろん授業をエスケープすることも大学生しかできないことだ。デート以上に私の授業が面白いわけではない。わくわくするような感情の高まりはないだろう。そもそも比較はできない。休んでもいいのだが、そのコミュニケーションの仕方が非対称なのだ。授業以外の場面でもこのようなコミュニケーションの仕方なのではないかと邪推してしまう。自分中心は恋の特権なのか、いや相手への気遣いこそが愛情ではないのか。逢瀬への欲動の高まりにこんな解釈は味気ないが、社会病理学の講義だったので、深掘りして多様な社

会病理と重ねて考える必要はあるだろう。

気遣うことと配慮することは同じような意味だし、愛しているなら余計に相手の希望や欲求、やりたいことへの尊重がいるだろう。相手の気持ちを慮ることは相手の幸福を願う気持ちそのものだ。

この事例を演習で討論していた時、「そんなに会いたいなら先生の社会病理学の授業に呼び出して、恋人同士の暴力（デートバイオレンス）やDVの話を開かせたら」という意見もあった。もちろん私の授業の内容は暴力のことをはじめとして知っておいて欲しいことではあるが、そうだとするとそれもまた強制になるのではないかと別の男子学生から意見がでて盛り上がった。

自分が自分の人生を生きているという実感は自己決定や自由意思を実感できる時だろう。それは「時間主権」ともいえる。自分の好きなように使う時間、自分が組み立てた予定、何もしなくてもいい時間がこうしたことを保障する。労働の時間や家族の時間はまた別の原理で動いている。契約があるし、義務でもあるし、他者のために使う時間でもある。それに対して自分のために時間を使うことを一方的に要請するコミュニケーションであることが問題である。何かしら感じたわだかまりは至極当然のことだと思えた。

②感情労働をしている

他者への配慮はケアである。愛情供給ともいえるだろう。ケアにはジェンダーの偏りがある。たとえば仕事。ケアする仕事は女性に多い。感情労働と名付けられている。主に看護師やフライトアテンダントの仕事の研究から導き出された言葉である。性別役割分業として女性に割り振られることを捉えた仕事の理論である。彼の意識のなかにはジェンダー

意識がある。二人の愛情の表現の仕方にも差異がある。会いたい時に会いたいといえるのは愛している者なら当たり前だという感覚なのだろうか。

彼女はそんなことはしないのだから配慮のあり方に違いがある。相手のことを考えているから気ままに呼びつけたりはしない。愛情があるからこそその配慮だし、彼の勉強のことや時間を奪ってはならないという配慮が働いている。それと非対称に彼は、自分の空いた時間を埋めるためには恰好の相手だと考えたのだろう。そこには愛情という名で、彼女は男性たる自分のことをケアすべきだと考えているあるいはケアして欲しいという「甘え」が見て取れる。

感情労働は親密な関係においても機能している。特に、恋人同士は愛情だけで結びついている不安定なものだ。恋人とのコミュニケーションは対称的だろうかと学生に問いかけた。相手の話を遮っていないか、コミュニケーションすることを無理強いしていないだろうか、相手の気持ちを無視して一方通行になっていないだろうか、説教したり命令したりしていないだろうか、すべてが愛情という名の下に進行していないだろうか、と。自己点検、相互点検してみるといいだろうと問いかけた。

ジェンダーは関係の非対称性のなかにある。点検するとどちらかが感情労働しすぎていないかがみえてくる。極端な言い方をすると「感情奴隷」になっていないかの確認でもある。

「愛の労働？」という研究がある。こうした議論だ。「感情労働という用語は・・・最近では、対人的なアプローチで、親密なパートナーのポジティブな感情を促し、維持するための感情的支援行動と定義されている」と。

短いメールがもとになりどうするか悩みながら彼女は感情労働をしている。彼はさせている。ポジティブに関わることを要請される仕事や活動は多いだろう。恋愛はそれにあふれている。Love is Blind.とはよくいったものだ。感情労働、感情奴隷、愛情表現はよく似ている(Horne, R. M., & Johnson, M. D., 2018, A labor of love? Emotion work in intimate relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*)。

③ 嫉妬なのか

プライベートなことなので、どのような経過で恋人になったのか知らないし、付き合いの程度も聞いていない。よくある大学生同士の付き合いなのだと思う話を聞いていた。彼女がNOをいいながら考え込んだのはラインメールに含まれている社会的な背景を意識したからだろう。

その内容を類型化すると次の三つが推測できた。1) それが単なる命令だとすると野蛮な愛だといえる、2) 嫉妬からの束縛だとも思える、3) 純粋に無骨なだけの愛情希求だとすると先が思いやられる。

それぞれに対応するジェンダーの社会問題を想起させる。1) は野蛮さの陰にデートバイオレンスという言葉が見え隠れする。2) はストーキング問題の萌芽かもしれないと不安がよぎる。3) は成人を過ぎてもこの程度でしかない未成熟な男性とどこまで付き合えるのかと嘆息がでる。それぞれ現代の恋愛の一面につきまとう社会問題を表現している。とりわけ2)のストーキング問題は広く「恋愛の作法」として考えてもよいテーマだろう。ストーキング研究から紹介しておこう。性別によって行われやすいストーキング関連行動の種類に違いがあることを検討している研究があ

る。

「男性は女性よりも贈り物や手紙を渡す傾向が高いこと」が示されている先行研究を紹介している研究がある。「贈り物をするを男性的行動(masculine behavior)」。さらに、男性は「学校、職場、その他の公の場へ、彼/彼女を突然尋ねる」「家まで彼/彼女を突然尋ねる」「彼/彼女の家、職場、学校の外で待つ」傾向が女性よりも高く、メールやSNSといったサイバーストーキングよりも物理的に接触する行為をより多く行う傾向があることが報告されている。ストーカーを対象とした研究においても、男性の方が女性よりも直接的な接触行為をする傾向が高いことが示されている。(鈴木拓朗「ストーキング関連行動に関する一考察—研究知見の整理と行動指標の抽出—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第59巻、2019、1-11頁)。

彼のラインメールがただちにストーキング行為だという訳ではないが、ストーキング行為との重なりを感じてしまう。物理的な接触を望む傾向はもちろん分かりやすいが、ここで検討している全般を文脈におくと軽視できない。恋愛なので情熱的なアプローチはありうることだが考えておいてもよい行動である。

④ 恋人間暴力の萌芽なのか

講義ではDVのことは社会的な常識として身につけて欲しいし、市民社会の構成員として身近な人にもアドバイスできるようになって欲しいという意味で話している。加害者にも被害者にもならないというだけでなく、二次加害を加えることの問題理解はもちろん、身近な人にきちんと忠告し、対応できるように冷淡な傍観者であって欲しくないという意味である。

被害者の特性や親密な関係における暴力がなぜ起こるのか、DV防止法の基礎知識、子ども虐待との関連、世界の動き、長期的な影響、

被害者理解に役立つトラウマの研究動向等について話をしている。さらに恋人同士の暴力、同性同士のカップルにおける暴力へと広げて話題を展開する。

また、加害者臨床の見地からの私の取り組みや加害者特性についても講義する。特に恋人同士の暴力については婚姻関係にないなかでの暴力であり、拘束力は薄いから軽視してよいという意味ではなく、そうであるにもかかわらず起こることやストーキングにも展開しかねないことについて理解を促す。この点では、やはり恋人間暴力を無視できない。

自治体や大学でも恋人間暴力についての啓発を展開している。「つきあっているなら当たり前」と思い込んでいないか問いかける。SNS上でのトラブルも多い世代だ。恋人からの連絡には即レスしなければならない、メッセージになかなか返信がないとか、今は休み時間のはずなのにどうして返信をしないのか、愛しているからコミュニケーションしようとしているのに等、「監視の愛・束縛の愛」なのだ。実際にあったことだが、今どこにいるのか周囲の様子を写真にとって送るようにと指示がある事例もあった。これは女性側からの事例もあった。さらにこんな例も報告されている。周りを気にせずいきなりキスしたり、身体を触ってくるという。彼はそれを「大らかなラブ」というらしい。

恋人同士の暴力は関係性だけの間柄なのでよけいにそこに負荷をかけることになる。嫉妬と愛と束縛は同居している。

⑤ 性的同意について

①とよく似たことだが、ラインメールの彼は同意を得るという発想がない。講義のなかでは恋人間暴力から展開して「性的同意」の話をした。刑法の性犯罪規定の見直し議論も

紹介した。性犯罪規定が被害者に厳し過ぎるという論点だ。

京都の男女共同参画センターである「ウィングス京都」(公益財団法人/京都市男女共同参画推進協会)が『GENDER HANDBOOK～必ず知ってほしい、とても大切なこと。』と題した冊子を関西の大学生有志で作成した(2018年8月発行、同センターのHPからダウンロードできる)。「性的同意」がテーマである。

「イヤよイヤよも好きのうち」の問題点を洗い出している。No means Yes.がいかにおかしな言い方なのか理解できるように作成されている。次のような表現があがっている。

「付き合っているのなら性行為をしていい、相手がイヤと言ってなかったら性行為もOKのサインである、酔った勢いで、性行為に及ぶのはしかたがない、互いに成人していれば、性行為の際に同意を求める必要はない、家に泊まるのは性行為をしてもいいというサインだ、同じ相手に、毎回、性行為の同意を取る必要はない、ナイトクラブに来る人は出会いや性的交遊を求めて来る人が多いので、性行為に際して同意を取る必要はない」等である。恋人同士の付き合い方の再考を促している。大学生たちの体験をもとにして「性的同意」という刑事法にも日常生活にも関係する言葉でまとめている。

「イヤよイヤよも好きのうち」はレイプ文化そのものの言い方である。若い世代もこれを内面化しているといえるだろう。先の例示は実際の体験にもとづくのだから。現実だとするとあちこちで恋愛という名の下にレイプが行われている。レイプは「強姦」(この言葉も強制性交等罪と変更された)と訳すのではなく、意に沿わない性的行為の強要という意味

が本来の意味である。だから性的同意の有無という言い方を言葉のより適切な意味で使おうという提案である。

このフレーズが存在している社会なのだ。社会意識として中空に漂っているのではなく、日々のセクシャリティやジェンダーの在り方に関わり実践するように「呼びかける意識」である。それはとても能動的な役割を果たしている。レイプ神話については男性に対してそう呼びかけている意識だともいえるだろう。この「呼びかける」という作用は「そうだ」ということでこれを受容する男性の意識があり、それはあたかも男性の性の在り方として、真実なものとして心のなかに存在しているように仮構させる。ようするに動機として呼応しているように見せかける。これは「動機の話彙」ともいわれている(『対人援助学マガジン』第15号, 2013年)。

誰かが教えたわけでもなく、真実であるかのように思い込む。ロコミ、メディア、漫画、アニメ、映画等が総動員される。男らしい振る舞い方のシナリオのように呼びかける意識である。彼のメールはセックス以前のことではあるが、コミュニケーションの形式が似ている。一方通行だし、同意を求めているようでもない。自分が中心である。しかも恋愛の相手だということで安易な指示のようにも聞こえる。一種の「呼びかけ行為」である。相手が応答することを期待している。そうしないとうなるかを相手は先回りして意識することへの配慮はないかもしれない。

このテーマ、議論はさらに大きな動向の一環でもある。この点に関わり日本学術会議からの提言書がある。「『同意の有無』を中核に置く刑法改正に向けて—性暴力に対する国際人権基準の反映—」(2020年9月29日日本学

術会議)である。刑法178条2項は意に反する性交の全てを準強制性交等罪として処罰しているものではなく、相手方が心神喪失または抗拒不能の状態にあることに乗じて性交をした場合など、暴行または脅迫を手段とする場合と同程度に相手方の性的事由を侵害した場合にかぎって同罪の成立を認めていることを問題としている。

日本では、意に反する性行為を無理やり行ったとしても、それだけでは処罰されない。合意認定が加害者に甘すぎる。刑法では、被害者が必死で抵抗しないと強制性交罪とは認められない。実際は、優位な立場を利用して、被害者が抵抗できない状況で合意のない性行為が行われることが多い。

2017年の刑法改正の際に国会で採択された衆議院付帯決議における「抗拒不能」の認定について、被害者と相手方との関係性や被害者の心理をより一層適切に踏まえてなされる必要があるとの指摘がなされたくらいである。刑法規定の問題は社会意識のことではなく明確な規範としての法律が宿す課題である。

この点については国際的な動向を参考にすべきだろう。「同意のない性行為はレイプ」とする動きである。デンマークは2020年12月、同意がない性行為を犯罪とする法律を可決した。欧州では12番目だという。先の日本学術会議の提言は「少なくとも『同意の有無』を中核に置く規定(『No means No』型)に刑法を改める必要がある」とした。

スウェーデンは「同意のない性交は犯罪」としてさらに先を行く。「性行為には積極的な同意が必要」とした。Yes means Yes.である。これらに比べると日本で漂っている No means Yes.がいかにか非人権的かが浮かびあがる。

被害者の抵抗する努力が問われているといえれば言い過ぎだろうか。このテーマにつながる性的同意という言い方である。彼のラインメールの無意識は日本に根ざしたものだろう。

⑥ 相手の意思決定を尊重すること

否定の意思表示にはパワーが必要である。したくないことを主張できることは自己決定権の行使だ。これに関わり自己決定理論がある。内発的動機づけの概念を発展させた理論である。行動に対する自己決定性の高さが学業成績やパフォーマンス、精神衛生や身体の健康等に影響を与える。なかでも「基本的心理欲求理論」が関係する。この理論は、「有機体(個人)が健康であるために必要とするもの」と定義される欲求(needs)をふまえて、「自律性(autonomy)」「有能感

(competence)」「関係性(relatedness)」の三つの心理的欲求を、自己決定が十全に機能する基礎的欲求として考えている。自律性とは、自己から派生した、あるいは自己に裏づけられた行動をしたい欲求である。有能感とは、自身の力によって内的・外的環境と効果的にやりとりしたい欲求である。関係性とは、他者や集団との緊密な関係を確立したい欲求である。自律性の欲求、有能感の欲求、関係性の欲求として具体化されていく。他者と共にある社会のなかでこれらは満たされる (Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being, January 2000, *American Psychologist*)。

ラインメールにきちんと応答する力の源泉はこの自己決定理論からすれば三つの心理的欲求を保持している彼女の力である。同じようにして彼がこの心理的欲求を満たしており、それに相応しい行動をしているならばこうし

たメールは送らないはずだ。筋が通っていないからだ。

自らの基本的欲求を満たして欲しいならば同じ基本的欲求を抱えている他者がそこにいることを前提にコミュニケーションするはずだ。他者である恋人の基本的欲求を満たすべきだろう。同じ欲求を相互に尊重し、満たすべく行動することこそが自己決定の内容となるからだ。これは他者への敬意である。社会を成して生きているので、自らの基本的欲求を充足させる他者の存在を認めてはじめてこの基本的欲求が成り立つ。特に自律性は相手も自分も相互に自律的であることが不可欠になる。

⑦ ストーキングのはじまりなのか

恋愛時代の愛情は駆け引きも含まれる。それは容易にコントロール行動へと変化する。恋人同士は愛情でしか結びつかない関係だ。婚姻が家族制度に依ることに比べると自由な関係性である。愛がむき出しになるともいえるようか。赤裸々な欲望の発現の相互行為となる。関係性は見えないものであり、当たり前のようにして、なかば無意識にやり過ごされていく。しかしその人の「やり方(日常の実践)」に関係性は埋め込まれている。恋愛にはコントロール行動となりうる執着心、嫉妬心等の情動が含まれる。それが昂じていくと社会病理となる。「ストーカー行為の自然史」の端緒といえるものが含まれる(「ストーカー行為の自然史—関係についての非対称な認識の展開過程」ロバート・M・エマーソン/ケリー・O・フェリス/キャロル・B・ガードナー/渡會知子訳、『新版 構築主義の社会学—実在論争を超えて』平英美・中河伸俊編、世界思想社、2006年)。

1990年代、カリフォルニア州で反ストーキ

ング法が成立した。「女性の問題として、すなわち、典型的には男性が以前の配偶者や恋人に対して行う、広く見られる深刻な暴力の前段階として」捉えられるようになっていった。ストーキングとして同定される形式は、一緒になって新しい関係を形成していく過程、今ある関係を解消したりそこから出ていったりする過程というごくありふれた普通の関係においてちょっとした不具合や食い違いから発生すると指摘している。

この研究は、プロセスがあり、愛情の表現からはじまる自然史があるとして特徴を描いている。「日常的な追いかけ(付け回すこと)」が基本となる。受け取る電話の頻度が多くなる、贈り物が豪華になる、家や職場に定期的に姿を見せる、自分の家族や友人のネットワークに侵入される等が指摘されている。そしてエスカレートする一方の付け回しとなる。

「脅威にさらされているという認識は深まり」「絶望的な性質を帯びる」ようになる。さらに「復讐への転回」の段階になる。追いかける側は「敵意や嫉妬、仕返しをするという脅迫の表現を、愛と関係の要求に混ぜ合わせるようになる」と分析している。ストーキング行為のプロセスについて事例をもとに指摘し、これを「ストーキングの自然史的過程」と呼んだ。彼のラインメールがその端緒でなければよいと思う。

⑧ 理由を説明することの負荷

このやりとりは、彼女が No という理由を説明しなければならない事態になっている。対等ではなく、一方的なメールなのだから、その理由を説き起こすようにして述べることはさらに負担である。コミュニケーションをめぐる応答の仕方に偏りがあるといえる。彼の一方的な欲望には応じられないことを説得

するように説明する責任が彼女にあるようにも見える。もちろん責任は彼女にはない。しかし彼女は何かの「言い訳」のようなことをするはめになる。彼に陰性感情を生起させないかと不安になる。もちろん授業があるという事実を返信するだけだったとしても何かしら「後味」が悪い。だからわざわざ話にきたのだろう。

このことで思い出すのは私が事実婚をし始めた際にどうして法律婚をしないのかと説明を求められたことだ。もう30年以上も前のこと。また別に、どうして同性が好きなのかと説明を求められることが多いと同性愛の人たちが言っていたことも思い出す。説明を求められるのは少数派の方だ。事実婚は説明し始めたらきりが無い。同性が好き理由は異性が好きな理由と同じように説明はできない。特定のあの人が好きな理由なら同性だろうと異性であろうと説明出来るかも知れない。

多数派がもつ理解の支配的なストーリーが主流としてあり、それから外れると説明を求められる。多数派の「常識」に認知的な不協和が生じているのだろう。

さらに言えば、単に不協和が生じているだけではこうした事態をうまく説明できない。彼も自分の会いたい欲望を実現できない不満を持つかも知れないことは予測がつく。自らの欲望が主になっているからこそ無配慮な行動になる。彼女がNoという返信を返す負荷は不安とともにある。ジェンダー化された恋愛のストーリーが彼のなかには当たり前のように存在しているのだろう。俺の会いたいという欲望が第一なのだ。

Noという返信は彼が保持する主流の恋愛ストーリーからは外れているので、不協和が起こる不安がある。勇気をもって次に会う時

のことをいろいろ予期してNoと返信しなければならない。こうした関係性に無知ともいえ、それは社会病理的な事態への展開を含んでいるので脆弱な者がそれに耐えたり、修正したり、弁明しなければならない。これは無知や配慮不足な事態だが、認知的不正義として把握することが正確だろう(『対人援助学マガジン』第38号、2019年で詳述した)。

こうしたやりとりは非対称的である。不協和ということではなく彼のなかに認知的な不正義がある。Noと返信されて怒りのようなものが彼に生じるかも知れないことを予期して丁寧に返信をする事態のなかに、関係性の非対称さが垣間見え、それに何らかの感情労働をさせられている権力の勾配がある。

⑨ 女性としてみるのか学生としてみるのか

恋人同士である前に学生同士である。だから勉強の話ばかりをして欲しいと思っているのでもない。勉強から逃げるような恋愛だと寂しい感じもする。このラインメールをここまで過剰に解釈しなくてもよいのではないかと思うが、脳裏に浮かんだことは、大学生らによる集団暴行事件や疑惑が立て続けに報じられたことである。慶應大学の学生による集団暴行疑惑、千葉大医学部の学生らによる集団強姦事件、そして大きなインパクトを与えた東大わいせつ事件がある。彼のラインメールは遠く重なりあうように嫌な感覚をもたした。

報道によるとこの事件はこうだ。2016年4月に東京大学に通う学生によって東京大学誕生日研究会というインカレサークルが設立される。このサークルが設立された目的は性行為や乱痴気騒ぎをするということであった。5月10日の夜にサークルの飲み会の一次会が池袋で行われた。一次会ではゲームが行われ、

それに負けると焼酎を一気飲みさせるという内容であった。

被害女性は酔って寝たふりをしていたが、その時に胸をつついて起こされたり背中に手を回してブラジャーのホックを外されるなどされた。帰ろうとしたが引き止められた二次会で犯行が行われる。犯人は被害女性のTシャツを剥いで背中から胸をもんだ。その次にズボンも剥ぎ取られ背中を叩かれ、続いて他のメンバーも背中や尻を叩いた。それから割り箸で肛門をつつき、陰部にドライヤーを当てる等をした。その時に被害女性はやめるように言ったがやめなかった。犯人が被害者に馬乗りになってキスをしてカップ麺を食べ、その時に故意に麺を落とした。被害者は激しく泣いたため他のメンバーは通報を恐れ二人を引き離れた。被害女性は周りの制止を振り切って部屋を飛び出し、警察に通報したことで事件は発覚した。

この事件はさらに想像力の力を借りて、社会の構造的な問題として描かれた。『彼女は頭が悪いから』(姫野カオルコ著、文春文庫)である。純粋なフィクションだ。この小説の核心部分はこうだ。事件のニュースを知った人たちが、ネット掲示板で被害者女性を「東大生狙い」の「勘違い女」扱いするのである。そして報道の内容だけで、被害者と加害者のランク付けし「東大生が女子大生に将来を台無しにされた」と決めつける。この小説は読み手の無意識下にある学歴至上主義を問題にする。読者に対して毒がある。挑発している。あなたは加害男性と同じ意識をもっていないのかと。被害者となった偏差値48の女子大生をあざ笑う。この物語は被害女性へのバッシングであり、二次加害・被害を扱っている。「これは彼女と彼らの、そして私たちの物語

である。」と本の帯に書いてある。タイトルがすべてを表現している。

ラインメールの彼はこうした大学生たちとは違うだろう。恋愛という名の下に彼女の自由な世界を軽視しているのではないか、自分の欲望の実現が中心となっているのではないか、学生としての相手への配慮に欠けることそれ自体がジェンダー秩序の反映だろうということが気になり、「私たちの問題」と小説が指摘することと彼のメールを重ねて考えることも大事かと考え紹介してきた。

3. 関係の非対称性と権力の勾配

ラインメールについてこれらの解釈はオーバーである。何もなければそれでよい。しかしひとつひとつは社会問題となっているテーマである。彼のメールから推測できることもどこかに紐付くかもしれない。社会病理学を勉強しているのだから自分事として考えて欲しいと思い、演習でも問いかけ、彼女にも応答した。一言でいえば、対等ではないかも知れない相互作用への疑いをもって欲しかったからだ。この点は「非対称な関係性と権力の勾配」という言葉に象徴される。まとめておきたい。

彼女はその後も授業で会えば快活に挨拶してくれた。その彼とどうなったかはプライベートなことなので聞いていない。彼女は社会病理学の講義を熱心に受講していたのだからここで考えたことは杞憂だったのだろう。

しかしこうした恋人同士のコミュニケーションは多い。演習での反応から分かる。若い男女や同性同士の親密な関係からジェンダーが生成する。誰が教えたわけでもないのに二十歳の若者がジェンダー秩序を「自然」に生

きている。

ここで深掘りしたひとつひとつは現実にあるし、調査や研究もあり、事件ともなっているジェンダーの現実である。こうした思考実験は大切だろう。ポイントはタイトルに掲げた二点、非対称な関係性があり、それは権力の勾配によってつくられていることだ。マジョリティとなる側（この場合は男性）がこれら諸点への意識的な理解を必要とする。

本マガジンに「社会臨床の視界」（第12号まで）でも紹介したが、非対称性は言葉がないことを考えると分かりやすい。たとえば、看板娘、箱入り娘はあるが看板息子、箱入り息子は無い。むこ（婿）養子とよめ（嫁）養子、ワーキングマザーとワーキングファーザー、女性の社会進出と男性の家庭進出等も同じで、後者の言葉はなく、非対称だ。これらは家族を介したジェンダー秩序に根ざしている。そこには社会的な権力の勾配がある。また、「肌色」と記されたバンドエイドを貼ってその表記のもつレイシズム的な意味を何も感じないことも同じだ。これらは日常のなかにある構造的な問題の表出である。この点については「臨床社会学の方法(10) サイレンシング（沈黙化作用）—語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮—」（『対人援助学マガジン』Vol.6 No.2、通巻第22号、2015年9月）で詳述してある。

同じ趣旨のことが書かれた書物がある。レベッカ・ソルニット著/ハーン小路恭子訳『わたしたちが沈黙させられるいくつかの問い』（左右社、2021年）である。沈黙を強いることとして非対称性や権力の勾配について数多くの事例をあげて指摘している。「声や物語に対する暴力」「自由を奪う」という。彼のラインメールを深掘りして考えてきたことと重な

る指摘である。